



生命体としての国 家

小林 道憲

生命体としての国家

国家は一つの生命体

国家を一種の生きものとして捉える国家有機体説は、西洋でも、アリストテレス以来現代まで、それなりに命脈を保ってきたが、第二次大戦後はすっかりすたれてしまったようである。第二次大戦後は、政治学の分野でも、国家を有機体論的には捉えず、むしろ機能論的に捉える考えの方が、主流を占めるようになったようである。しかし、流動化している国際関係の流れの中で、変貌する国家像というものを考えようとするなら、国家を、もう一度、常に生成変化する生命体として捉えてみる観点も必要になってくるように思われる。

われわれの人体ばかりでなく、生物は、一般に、体内に多くの器官を持ち、その器官は、それぞれ自律的に働きながら、相互に作用し合い、個体全体の流動的な秩序を形成している。生命体は、各部分が相互に作用し合い、制御し合いつつ、動的秩序を保つ全体なのである。同様にまた、国家も、その内部に多くの組織を持ち、その組織は、それぞれ自律的に動きながら、しかも互いに関係し合い、国家全体の流動的な秩序を形成している。国家も一つの生命体なのである。さらに、生命体、特に動物において、脳だけがすべての器官を支配しているのではないように、国家においても、単に政府だけがすべての組織を支配しているのではない。動物における脳の働きが、各器官の自律的な働きとその相互作用の調整・統御にすぎないように、国家における政府の働きも、内部の各組織の自律的な働きとその相互作用の調整・統御にある。

その点では、二十世紀が生みだしたナチズムや Kommunismus など、全体主義国家は、極めて不自然な国家体制だったと言わねばならな

い。全体主義国家は、一人の独裁者とそれを取り囲む巨大な官僚組織が、国家内のあらゆる組織を支配統制しようとする体制であった。国家を一つの流動的な生命体としてみた場合、それは、あまりにも硬直化した国家体制であった。何よりも、これは、各組織の縦横な相互作用を欠いた支配体制であったために、外部環境の変動や内部環境の変化に、柔軟に対処していくことができなかった。

生物は、植物にしても、動物にしても、まわりの環境から物質やエネルギーを摂取し、絶えず環境との相互作用を行ないながら、自らの秩序を形成し、維持しようとしている。生命体は、外部環境との相互作用によって、常に変化しつつ、自ら秩序を流動的に維持していくシステムである。

国家も、また、自然環境ばかりでなく、まわりの諸国家との交流を通して、物資や情報、人材や資金を交換し、自らが置かれている国際環境との相互作用を行ないながら、それに合わせて自分自身の秩序を形成し、維持しようとしている。国家も、生命体同様、外部環境との相互作用によって、常に変化しつつ、自らを維持していく生きたシステムなのである。生命体が、周囲の環境を読み込みながら、自分自身の構造や機能などを常に変化させて存続していこうとしているように、国家も、また、常に変化し流動してやまない国際環境を読み込みながら、それに適応するために、しばしば自らの制度や構造を変革しつつ、サバイバルしていこうとしている。まわりの諸国家の同盟関係の変化、諸国家の国力の消長、自国の置かれている国際的地位の相対的变化など、自国を取り巻く環境は絶えず変動している。その変動する環境に適切に対応していけなかったなら、その国の生存さえ危うくなることもある。

今日の日本も、大きな国際環境の変動に面している。ある意味で、幕末維新の大変動以来の大きな国際環境の変化に直面しているとも言える。この国際環境の急激な変動に対応していくために、外交政策はもちろん、国内の制度や機構、内部構造まで変革して、適切に対処していくことが求められている。これも、国家というものを流

動変化していく生命体として捉えるなら、よく理解することができるであろう。生命体が、外部環境との相互作用のもとで、その変化に適応しつつ絶えず内部を変化させながらうまく生きていくように、国家も、また、外部環境の変化を読み込みながら、自分自身を変容させ、自己保存をはかっていかねばならないのである。

国家も進化する

植物にしても、動物にしても、生命体は、環境との相互作用によって自己を維持していくが、環境そのものも常に変化しているから、生命体は絶えず環境との矛盾や齟齬をきたす。そのため、生命体は、この環境との矛盾を克服するために、時間的に変化していく。しかも、この変化は、長い時間間隔でながめれば、単なる個体保存や種族保存の段階を越えて、進化という形で現われてくる。生命の進化は、環境の変化に対する生命体の主体的な対応から生まれる。生命体は、環境の変化を自分自身の中に読み込んで、自ら主体的に新しい形態や構造、機能を作り出す。環境との不調和が生じてくれば、それを乗り越えるために、生命体は、積極的に自分自身の中から自分を作りかえて、環境との調和を取り戻そうとする。

国家も、また、国際環境との相互作用によって自分自身を維持していくが、この国際環境も、しばしば大きく激変する。そのため、旧来の制度や機構、構造では対応し切れず、外部環境との大きな矛盾に面することがある。このような時、国家は、多くの場合、生命体同様、環境との矛盾を克服するために、自ら主体的に環境に適応した新しい制度や構造を作りだし、自己保存をはかる。国家も、生命体と同じように、進化していくものなのである。しかも、それは、生命体同様、環境の変化に対する主体的な対応から生まれる場合が多い。国家も、また、積極的に進化することによって、環境との齟齬を乗り越え、環境との調和を回復しようとするのである。

わが国の幕末から維新にかけての国家の大きな変貌も、外部の国際環境の大きな変動を契機とするものであった。欧米諸国の抗する

このできない進出に直面したわが国は、自国の存続をかけて、自ら積極的に、欧米の新制度や新しい社会機構、産業構造、文化や思想を受け入れて、自分自身を大きく作り変えていった。旧来の幕藩体制を廃して、新しい内閣制度や議会制度を作り、旧来の身分制社会を平等社会にし、近代産業の育成をはかり、西洋の新しい文物を積極的に受け入れていった。それは、それまで数百年の間なかったような大きな変動であり、構造変革であった。だが、このように、外部環境の大きな変動に対して果敢に自らを変貌させ、適切に対応していったために、わが国は、近代国家として欧米諸国の仲間入りを果たし、自己保存をはかりえたのである。わが国も、いわば自ら積極的に進化することによって、地球規模の近代化という環境に適応したのである。

生命体にとっても、地球環境は時に激変することがある。その激変は、どの生物にとっても予測不可能なものであるが、この予測不可能な環境の激変に対して、生命体は、絶えず遺伝子を変異させながら、自らを作り変える用意をしている。通常、この遺伝子の変異は、生体維持機構によって摘み取られる場合が多いのだが、ひとたび環境の激変が起きると、生命体は、この遺伝子の変異を利用して、能動的・体系的に一定方向への変異を起こし、自らの形態や機能を変え、進化していく。遺伝子にこのようなゆらぎがあるということは、環境の変化に効果的に適応するための生命体の知恵なのであろう。生命体は、絶えず自分自身の遺伝子の中に異分子を抱えながら、これを利用して、危機に対して柔軟に対処し、飛躍していく。

国家も、また、時に激変する外部環境に対して、絶えず自分自身の中に異分子を抱えながら、危機に対して対応し、変貌していくことが多い。時の政府に反抗する異分子は、多くの場合、弾圧されたり懐柔されたりして、摘み取られてしまうことが多いのだが、環境の激変が起きると、むしろ、この異分子が大きく生きてきて、大衆の支持を勝ち取り、国家を新しい方向へと導いていく。こうして、国家は、新しい形態を獲得する。

わが国の幕末維新の変動をリードしたのも、幕藩体制下では不遇をかこっていた下級武士の不満分子達であった。清朝政府を倒し、中国を中華民国として新しく甦らせたのも、清朝下では反政府分子にすぎなかった孫文達の異分子達であった。旧ソ連を解体に導き、自由ロシアを再生していったのも、旧ソ連下においては反政府分子であった民主派の改革派分子であった。歴史的共同体としての国家は、そのような異分子を常に抱えていくことによって、危機への柔軟な対応を可能にしているのである。国家も、生命体と同様、構成分子の中に変異やゆらぎをもっていた方が、環境変動に対する効果的な適応力をもつ。国家も、生命体と同じように、環境の激変に対して、そのような仕方で創造的に適応していく。

求められる柔軟な対応

生命体にとって、どのような環境変動に見舞われるかは、予測不可能なことであり、また、その際、どのような生き方、どのような形態を環境に応じて採用していくかは、あらかじめ決定しておくことはできない。その意味で、生命体は、いつも環境の変動という偶然に面している。生命体は、この偶然に対して、まえもって一定の計画に基づいて生き方を決めているのではなく、その場での環境との担相互作用のもとで、ある意味で自由に生き方を選択していく。生命進化のための究極目的や計画が最初からあるのではない。むしろ、そのような遠大な目的や計画をあらかじめ設定して、これに固執していると、かえって環境の変動に対応し切れず、絶滅の危機さえ招いてしまう。

人間の営む国家においても、人類社会が到達すべき究極目標を掲げ、それに向かって歴史や社会を人為的・計画的に動かしていくことができると考え、これに固執していると、目先の環境の変化に対応し切れず、かえって自国の解体を招いてしまうことがある。二十世紀末の旧ソ連の解体も、そのような柔軟性の欠如と流動変化する歴史的環境への見誤りによると言わねばならない。旧ソ連は、周囲

の資本主義諸国が刻々と変動進展していたにもかかわらず、自ら信奉したイデオロギーに固執して現実を見失ってしまった。そして、自分達の理論通りにいずれは資本主義国家は滅ぶべき運命にあると確信して、その考えに固着しているうちに、外部環境から取り残されて、自らの解体を招いた。旧ソ連は、どうなるか分からない非決定的未来を無理に略奪し、自分達の思い込み通りになるべきだと考え、変動する歴史の流れを見失ってしまったのである。

この点では、冷戦時代の一方の雄であったアメリカも、同じような誤りを冒している。二十世紀のアメリカは、自らが国是とする民主主義の理念は万人普遍の原則であって、アメリカはこれを人類社会に宣布する義務があると考え、その経済力や軍事力をふんだんに使って、世界にコミットしてきた。だが、このような普遍主義的イデオロギーにあまりにも固執していると、状況の変化が見えなくなってしまう恐れがある。

世界の諸国家は多種多様である。民族性においても、歴史的経緯においても、近代化の度合いにおいても、統治形態においても千差万別である。諸国家は、それぞれ自国の事情と環境に合わせて生き方を選択しているのもであって、必ずしもアメリカニズムを最高の価値と考えているわけではない。アメリカがその強大な軍事力と経済力と技術力をもって世界にコミットしている間は、相当数の国家が、軍事的庇護や経済援助を当てにして、アメリカの世界支配に従うけれども、一旦その背景となるアメリカの国力が衰退していけば、各国家も離散していく。

そのような状況変化も読み込めず、なおまだ、冷戦時代に少なくとも世界の半分を支配していた原理や、世界の警察としての誇りを忘れられず、なおそれらに固執していれば、アメリカの衰退は逆に早まることになろう。今日でも、核兵器による一国支配へのなお残る夢、国連を利用した紛争地域への過剰介入などには、アメリカがなお固執し続けている大国主義の残存がみられる。アメリカは、むしろ、状況の変化と自国の国力に合わせて、世界へのオーバー・コ

ミットメントをやめるべきなのである。世界の諸情勢は、その流動に任せておいた方がよい。

流動することが常態

国際関係も、生命と同様、常に変化してやまない流動である。世界の諸国家も、各生命体と同様、流動する環境の中を、いわば平均台を進んでいく体操選手のように、相対的な安定を求めて進んでいく。国家も、生命体も、内外の環境との絶えざる相互作用によって、自らを維持し自ら変化していく流動平衡体なのである。国家という概念は固定化したものではなく、生命同様、流動概念であり、常に生成変化するものなのである。国家とそれを囲む国際環境も、生命体とその環境と同じく、川の流れるように絶えることなく変化していく。そして、国家も生命体も、絶えず変化する状況の中を、その形態や機能、構造や制度を、常に変えていく。国家も生命も流動そのものであり、生成そのものである。流動変化することが常なのである。

もちろん、生命同様、国家が流動概念であったとしても、国家にとって失ってはならないものはある。何よりも、生存は、生命体同様、国家にとっても最後に残る価値である。さらに、国家にとっては、単なる生存を越えて、自国の自由と独立、威信、自らの来歴の記憶とアイデンティティ、それらは失ってはならない価値である。国家は、むしろ、それらを維持するために、外部の制度や構造を柔軟に変えてもいく。国家には、変わるべきものと変わるべきでないものがある。共同体としての国家は変わらないが、制度としての国家は、環境に適応して常に変わっていくべきものなのである。

世界は、今、アメリカ圏、アジア圏、ヨーロッパ圏を中心とした三極構造に向けて、二十一世紀の新しい秩序を目指して流動変化している。この流動状態を反映して、わが国の政治状況も激変しているが、この内外にわたる流動化現象も、国家というものがもともと生成変化してやまない流動体だとすれば、必ずしも恐れるべきこと

ではない。むしろ、この流動と混沌を積極的に引受け、自らを創造的に作り変え、変革し、新しい環境に適応させていくべきであろう。